

いつも当社システムをご利用いただきありがとうございます。
今月分の請求書をご査収の程よろしくお願い申し上げます。

いつも大変お世話になっております。

朝晩は涼しくなってきましたが、日中はまだまだ暑い日が続いております。皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

芸術の秋を先どりして、美術館にに行ってきました。

まずは、大阪市立美術館で開催された「ゴッホ展 家族がつないだ画家の夢」へ。

3月1日にリニューアルオープンした大阪市立美術館。5月頃「日本国宝展」を観たくて立ち寄った際、入り口に長蛇の列ができていて諦めたので、今回は事前に予約して行きました。

ゴッホ展はいつも大人気なのに、入り口前がガラガラで意外に思ったのですが、館内にはしっかりと長い列ができていました。会場も多くの人でにぎわっていて、特に混み合っている場所を避けながら、行ったり来たりして、見たい絵をじっくり鑑賞しました。ゴッホが集めた同時代の画家の作品も展示されており、彼は本当に絵が好きだったのだなぁと思いました。

今回の展覧会はタイトルにもあるとおり、ゴッホの弟のテオとその妻のヨー、そして息子のフィンセント・ウィレムにも焦点が当てられていました。

ゴッホを経済的に支え続けたテオは、兄の死から半年後に亡くなってしまいます。その後、ゴッホが残した絵を受け継いだヨーは義兄の作品を世に出すことに人生を捧げ、息子のフィンセント・ウィレムは、コレクションを散逸させないためにフィンセント・ファン・ゴッホ財団を設立し、美術館の開館に尽力したそうです。

純粋な家族愛からなのか、それとも必ず評価されると確信があったのか・・・いずれにせよ、生前は不遇だった画家が死後には巨匠とよばれるようになるには、家族からの大きな力があったのだなぁと感じました。

その翌週には、友人に誘われて市立伊丹ミュージアムで開催された「タピオ・ヴィルカラ 世界の果て」に行ってきました。

タピオ・ヴィルカラはガラス製造会社「イッタラ」のデザイナーとして、妻のルート・ブリュックは、「アラビア製陶所」でアーティストとして活躍していた夫妻で、北欧好きの方には有名かもしれませんが、私は今回初めて知りました。

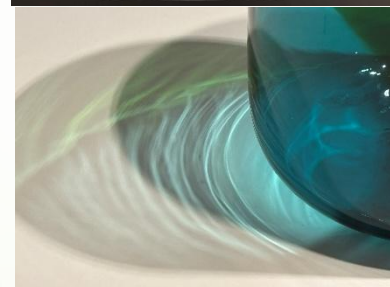
展示はガラスだけでなく、金属製品、積層板のオブジェなど多彩で、工業的な製品であっても、自然や生き物を思わせる有機的な雰囲気があり、とても魅力的でした。特に、ヴィルカラがグラファイトを削ってつくった型や絵に、強く惹かれました。フィンランド最北の地・ラップランドの小屋で、静寂と孤独のなかで研ぎ澄まされた感覚を磨きつづけたという彼自身の生き方にも惹きつけられました。

「最果ての地、極北の島」という意味をもつ「ウルティマ ツーレ」。ラップランドの氷が溶ける様子にインスピレーションを得てデザインされたイッタラ史上最も人気のあるガラス食器のシリーズなんだそうです。同じ名前をもつ大きな木彫作品《ウルティマ ツーレ》の写真が展示されていました。現物はエスポー近代美術館に收藏されているそうで、いつか観に行きたいものがまた増えました！

いつまでも暑い日が続いております。夏の疲れがでませんように、どうぞご自愛くださいませ。



リニューアルされた大阪市立美術館



影も美しい！！

今月も最後までお読みいただき
ありがとうございました。
来月もよろしくお願いいたします。